
眠れない夜

律花

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

眠れない夜

【コード】

N0348V

【作者名】

律花

【あらすじ】

眠れない夜、僕はいつもベランダに立つ。

耳に突っ込んだイヤホンから流れるのは、激しいエレキのうなりと、叫ぶようなボーカルの歌声。

歌詞はよく言えば難解、抽象的で、悪く言えば支離滅裂だ。だけど、それでいい。いろんなものが絡み合って、ぐちゃぐちゃになった僕の思考を吹き飛ばし、心に静寂を与えてくれる。

だから、いまは存分に身をゆだねようと思う。そうして、真夜中に起き出して音楽を聴くなんてことも、今日で最後にしてやる。

アルバムを一枚聴き終えたところで、僕はウォークマンの電源を切り、イヤホンを外した。それから見るともなく窓の外に視線をやる。月も星も見えない空は真っ暗で、町もひと、夜明けを待って眠っている。

ふと僕は馬鹿げた妄想にとらわれる。もう日が昇ることはなくて、人びとはずっと眠ったままで、自分だけが世界に取り残されてるんじゃないかと。だとしたら、これ以上のことはないのに。

ベッドから降りて自室を出る。両親が寝ている和室の横を通り過ぎ、リビングの窓を開け、素足でベランダに出る。梅雨明けの空気が生ぬるく、肌にまとわりつく。マンションの九階から望める町は、いつも通り雑然としていた。

湿った風を浴びながら、僕は手摺りに手をかけ、すこしだけ身を乗り出した。

眼下に広がるのは、夜の闇に沈んだ駐車場。アスファルトに引かれた白線、整然と並ぶ乗用車。

じっと見つめていると、吸い込まれそうだった。乾いた目を二度またたく。いまだと思う。いましかない、と。だけど、足がすくむ。

指先が硬直して、動かない。心臓の鼓動が速まり、身体の芯が小刻みに震える。

僕は大きく息を吐いた。ふっと全身が軽くなって、すぐに絶望的な想いが胸に込み上げてくる。

また、だめだった。

リビングに戻り、僕は窓を閉めた。自室に入ると、シーツの乱れたベッドに倒れこむ。冷房のきいた室内の空気が、にじんだ汗を乾かしてゆく。

しんとした空間に、かちかちと秒針の振れる音だけが響く。耳障りだった。時計を床に叩きつけて、破壊したい衝動に駆られる。けれど、それをする気力すら湧いてこない。

じっと寝転がっているのもかつたるくて、何度も寝返りを打つ。けだるい身体は眠りを求めているのに、相変わらず脳は冴え渡っている。

誰もが当たり前に持っている生理的欲求。そんなものさえ、ろくに満たすことのできない人間になってしまったらしい。いつからか僕は、夜が来ても満足に眠ることができなくなっていた。

目を開けて、明かりの消えた天井を眺めていると、暗がりにはそむなにかに頭を侵食されてゆく気がする。いてもたってもいられなくなつて、大音量の音楽で気を紛らわせる。気が遠くなるほどずっと、こんな夜が続いている。うんざりしていた。終わらせてしまいたかった。

だから、僕は毎晩ベランダに立つ。手摺りごしにひと気のない駐車場を見下ろして、空中に踊る自分の姿を夢想する。だけど、僕の意に反して、足は砂まみれのベランダに張りついたまま。こわばった手は、握り締めた手摺りから離れようとしなない。

暗澹たる気持ちを抱えて部屋に戻った日々だって、もう数えきれないほどだった。

この世とあの世、こっち側と向こう側。

たやすく越えられるはずの境界線を、いつまでも越えることができなくて、ぐずぐずしている自分。心底嫌気がさす。時計なんかじやない、一番壊してしまいたいのは、めちやくちゃにしてやりたいのは、この僕だ。

一瞬の苦痛が怖いのか？ そのために、毎晩毎晩、こんな時間を過ごしているのか？

この世に未練なんてない。僕を引き止めるやつなんて、誰ひとりとしていないのだから。

大学受験に失敗して、滑り止めの私大しか受からなかった僕をあっさりと見限った両親。いまは、かつての僕なんかよりはるかに優秀な弟に、かかりきりになっている。期待はずれ。どうしようもないやつ。両親が陰で、僕に向けた言葉だ。

友人と呼べる存在もない。バイトもせず、大学にもほとんど足を運ばず、一日の大半を家にこもって過ごしているのだから、当然と言えば当然だ。大学以前だって、似たようなものだった。中学時代に引越して、転校先の学校でいじめにあった。担任は見てみぬふりをしていて。高校時代には、多少接点を持ったクラスメイトもいたが、大学に入って以来、一回も連絡を取っていない。こうなれば、交換したメールアドレスなんて、アルファベットと記号の羅列にすぎない。

ひととひとのつながりなんて、ご大層な美辞麗句を並べたところで、その程度のものなんだと思う。ちよつとのきっかけや環境の変化で、たやすく断ち切れる。

それでも、かまいやしなかった。他人に対する執着なんて、いまや爪の先ほども持ち合わせていない。

枕に頭を預け、タオルケットにくるまりながら考える。人間の存在に価値を見い出せなくなったのは、いつからだろう、と。「いつから」なんて明確なラインはなく、いろんな要因が影響し合って、次第にそんなふうになっていったのかもしれない。

人間の本质はやさしいと、支え合って生きる姿は美しいと語る人びとがいる。ほんとうに？ 首を傾げてしまう自分がいる。

新聞をひらく。テレビをつけて、ニュース番組にチャンネルを合わせる。たまに出た町中で、ざわめきに耳を澄ませる。どこか遠い国で、正義の名のもとに、多数派が少数派を一掃しようと躍起になっている。人間が人間に、平然と銃を向けている。力のあるやつは既得権益を守ろうと必死で、自分たちの足元でもがいている弱者から目を背けている。他人を蔑み中傷することで、自分を誇示しようとする者がいる。ひとの不幸を嘲笑って、優越感に浸っているやつがいる。

出口のない思考に絡めとられて、あらゆる人間に対する嫌悪感、そして破壊衝動が沸き起こってくる。

僕自身もそうなんだって分かってている。自分が忌み嫌っているものと同じ、汚くて醜くて、弱い生き物。行き場のない感情の矛先が自分に向かう。そうなるともう、どうしようもない。断片的な睡眠しか取れずに、夜が明ける。

僕はベッドから起き出して明かりをつけ、部屋の一面に設置された収納庫の引き戸をひらいた。そこには衣類や漫画やCD、昔使っていたテキストやノートが、いっしょくたになって押し込まれている。特にあてがあるわけじゃなかった。最近読んでない漫画だとか、なにか暇潰しになるものでも見つければいいと思っただけのこと。下棚にめぼしいものはなく、狭い上棚を探ろうと手を伸ばした。口の開いたビニール袋に手をかけたとき、中に入っていた雑誌が雪崩のように滑り落ちてきた。思わず数歩、あとずさる。雑誌だけじゃなく、雑誌に支えられていたものまでが一気に落ちてきたようだった。

けっこうな音が響いたから、両親や弟が気づいたかもしれない。それでもいい。家族はみんな、暗黙の了解のように、僕をいないものとして扱っている。少々のことじゃ、なにも言われやしない。

僕は雪崩でできた山の前にしゃがみこんだ。ふと、色あせた雑誌の数々に紛れて、一枚の写真が落ちているのが目に留まった。僕はそれを拾い上げた。

十何年も前に撮られたその写真は、ほこりがこびりついて薄ぼけていた。

四角い紙切れの中で、母さんに抱かれた弟がぐずっていた。一方の僕は、父さんの腕にしがみついて、満面の笑みを浮かべていた。改めて足元を見ると、上棚の奥から落ちてきたらしい、何冊かのアルバムが床に散乱している。この写真も、どれかから剥がれ落ちたものなんだろう。僕はなにかに操られるように、アルバムを手にとって、ページを繰った。

幼稚園の制服を着た僕が、弟の頭を撫でていた。いまは亡くなった祖父に、うしろからうれしそうに抱きついていた。運動会だったんだろう、薄汚れた体操服を着た僕が、同級生とはしゃぎあっていた。カメラに向かって、両手でピースサインなんてつくっていた。

古ぼけた写真の向こうに広がる世界は、色鮮やかに、僕の脳裏によみがえった。

ずっと、忘れていた。

遠いとおい過去の僕は、こうじゃなかった。夜に眠れないこともなければ、自分やまわりの人間を憎むことも、消えてしまいたいと願うこともなかった。自分が好きで、家族や友達が好きで、毎日が輝きに満ちていたんだ。

なのに、どうして　なにが狂ってしまったんだろう。

僕は静かにアルバムを閉じた。そして、床に座りこんだまま、いつまでも境界線を越えられない自分を思う。

期待なんて、とつくの昔に失くしたはずだった。なのに、心のどこかで人間を捨て切れないでいる僕が、そこにはいた。

一瞬の苦痛が怖いわけじゃない。

ひとつのつながりが断たれるのが怖い。だから、届くかなんて分

からないけど、ぎりぎりまで手を伸ばしたい。

小さいころの僕がそうしていたように、ほんのすこしでもいい。やさしくもなければ、美しくもない人間の、その温もりに触れたい。ただ、それだけなんだ。

町もひとも眠っていて、静寂を破るものは、一定のリズムで振れる時計の秒針だけ。

床に落ちた写真の中で、幼い僕がしあわせそうに笑っている。けれど

ひとりきりの閉ざされた部屋で、いつしか僕は、古びたアルバムを抱いたまま、声を殺して泣いていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0348v/>

眠れない夜

2011年8月25日03時21分発行